岩倉使節団本隊（２３名）の人物列伝

（姓名、読み、生没年、出身、使節団出発時（1871 年）年齢、出発時身分・役職）

１・岩倉具視	いわくらともみ	1825 - 1883	公家	47	全権大使
２・木戸孝允	きどたかよし	1833 - 1877	長州	39	副使・参議
３・大久保利通	おおくぼとしみち	1830 - 1878	薩摩	42	副使・大蔵卿
４・伊藤博文	いとうひろふみ	1841 - 1909	長州	31	副使・工部大輔
５・山口尚芳	やまぐちなおよし	1839 - 1894	佐賀	33	副使・外務少輔
６・田辺太一	たなべたいち	1831 - 1915	幕臣	41	一等書記官外務少丞
７・何　礼之	がのりゆき	1840 - 1923	幕臣	32	同、外務六等出仕
８・福地源一郎	ふくちげんいちろう	1841 - 1906	幕臣	31	同、大蔵一等書記
９・塩田三郎	しおたさぶろう	1843 - 1889	幕臣	29	同、外務大記
１０・渡辺洪基	わたなべこうき	1847 - 1901	越前	25	二等書記官外務少記
１１・小松済治	こまつせいじ	1848 - 1893	紀州	25	同、外務七等出仕
１２・林薫三郎	はやしとうさぶろう	1850 - 1913	幕臣	22	同、　同
１３・長野桂次郎	ながのけいじろう	1843 - 1917	幕臣	29	同、　同
１４・川路寛堂	かわじかんどう	1844 - 1927	幕臣	28	三等書記官，同
１５・畠山義成	はたけやまよしなり	1843 - 1876	薩摩	29	同、　留学生
１６・安藤太郎	あんどうたろう	1846 - 1924	幕臣	26	四等書記官外務大録
１７・池田政懋	いけだまさよし	1846 - 1881	佐賀	24	同、文部大助教
１８・中山信彬	なかやまのぶよし	1842 - 1884	佐賀	30	大使随行兵庫権知事
１９・五辻安仲	ごつじやすなか	1845 - 1906	公家	27	同、式部助
２０・野村　靖	のむらやすし	1842 - 1909	長州	30	同、外務大記
２１・内海忠勝	うつみただかつ	1843 - 1905	長州	29	同神奈川県大参事
２２・久米邦武	くめくにたけ	1839 - 1931	佐賀	33	同、権少外史
２３・由利公正	ゆりきみまさ	1829 - 1909	越前	43	同、東京府知事

左から、木戸、山口、岩倉、伊藤、大久保。

右後ろ伊藤（帽子）、右前・木戸

１　岩倉具視（いわくら　ともみ）1825 - 1883　公家　47 歳　全権大使

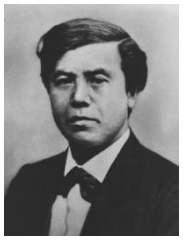
明治維新の立て役者　明治国家・国のかたちを探り続けた男

この人物がいなかったら、明治維新はもう少し遅れ、全く別の姿になっていたろう。

岩倉は下級公卿・堀河康親の次男として京都に生まれる。幼名：周丸（かねまる）。朝廷儒学者･伏原宣明に学び、１４歳､伏原の推薦で岩倉具慶の養子となり具視と改名。元服し昇殿を許されるが、岩倉家の役料１００俵、養子先も下級公卿に過ぎなかった。ペリー来航の嘉永６年（1853）関白・鷹司政道へ歌道入門し、朝廷首脳に近づく転機となる。３０歳で侍従に任官。安政５年（1858)、老中・堀田正睦が日米修好通商条約の勅許を得るため上京すると、大原重徳と共に勅許反対に立ち上がり、延臣八十八卿列参を演出して幕府を窮地に追い詰める。この時、孝明天皇に『神州万歳堅策』を提出。和親条約に基本的に反対して、相手を知るために欧米へ使節派遣して、熟慮する時間稼ぎを提案している。安政７年（1860）桜田門外の変で、井伊直弼が暗殺されると、岩倉は『和宮御降嫁に関する上申書』を提出し、公武合体を推進。和宮降嫁の際、江戸への随行役を務めている。その後尊王攘夷運動が高揚すると佐幕派と見做され､三条実美、姉小路公知などから、四奸二嬪（岩倉具視、久我建通、千種有文、冨小路敬直、今城重子，堀河紀子）として、弾劾されて辞官に追い込まれる。岩倉村に蟄居するが、これは岩倉にとって絶好の政情を熟慮する機会となる。禁門の変で京都の攘夷強硬論者である七卿が長州落ちすると忽ち名誉を回復した。慶応２年（1866)、孝明天皇が崩御し、翌年明治天皇が１６歳で即位。大政奉還が行われると、王政復古の大号令を大久保利通らと主導して、小御所会議で将軍・徳川慶喜の辞官・納地を強行議決する。

明治元年､岩倉は参与から議定へ昇進､海陸軍事務･会計事務の重要な職務を任され、実質的岩倉政権の体を成す。版籍奉還、廃藩置県を推進して、明治４年 11 月、右大臣兼遣外使節団・特命全権大使として、団員４６名、留学生６０名を率いて欧米回覧の壮途に就く。副使は、明治維新の立役者たる木戸孝充、大久保利通、伊藤博文、山口芳尚である。国政は西郷隆盛、大隈重信ら留守政府に委ねての１年９ヶ月余に渡る条約締結国１２カ国巡覧の旅は、西洋文明を見聞して「明治の国のかたち」を考える一大壮挙であった。帰国直後の明治６年の政変（征韓論排除、内治優先、富国強兵)、明治１４年の政変（憲法・国会へ漸進主義）が、外遊組が辿りついた「明治国家のかたち」への一つの回答であった。明治 10 年の西南戦争の前後に、木戸孝充、西郷隆盛、大久保利通が相前後して亡くなり、建国の業は岩倉と伊藤博文に託されたが、岩倉は華族の行く末を案じ、華族の金禄公債の投資先として、第十五国立銀行の創設、日本国有鉄道の設立などに積極的にかかわった。（２０１５・７・２９　山田哲司『岩倉具視』など参照）

２　木戸孝允（きど　たかよし）1833 - 1877　長州　３９歳　副使・参議



維新三傑・見識ある熟慮家。創業自助の人、誠実で温厚な大人風

明治維新の国のかたちを死の直前まで真摯に考え続けた、悩める国家プラナー。

萩藩医・和田昌景の長男として生まれる。幼名：小五郎。号：小菊。７歳で隣家大組士･桂九郎兵衛の末期養子となるが､直ぐに養父母がなくなり生家の和田家で成長する。１０歳代は、岡本栖雲に句読を、藩校明倫館の佐々木源吾に漢学、吉田松陰に山鹿流兵学、内藤作兵衛に柳生新陰流剣術、仙波喜間太に馬術などを学ぶ。嘉永５年（1852）２０歳で、剣術修行名目で江戸に出て、練兵館・斉藤弥九郎に入門、神道無念流剣術を習い一年で免許皆伝を得て、５年間塾頭を務める傍ら、韮山の江川太郎左衛門に洋式兵学を、中島三郎助に造船術を、神田孝平に蘭学を学び、江川に附いてペリー艦隊を実地見聞する。萩に戻り、有備館用掛、同舎長、右筆副役、学習院用掛を歴任し、次第に藩で重きを成し、周布政之助ら開明派と組んで、長州五傑の英国留学を推進。蘭・英語に精通した村田蔵六を登用する。文久３年（1863）藩命で。京都に出て久坂玄瑞らと破約攘夷活動に動く。八月十八日の変後は、京に潜伏し情報蒐集に努める。３２歳の元治元年、京都留守居役として、中岡慎太郎、坂本龍馬らと接触。蛤御門の変では、明治天皇への直訴かなわず､燃える鷹司邸から切り抜けて逃亡し幾松らの助けで潜伏生活に入る。この頃、藩命で木戸貫治と改名、翌年、更に木戸準一郎と改名。第一次長州征伐の後、復権して藩政府の中枢に座る。慶応２年、幾多の変遷の後、薩長同盟締結に漕ぎつける。第二次長州征伐では、兵器・軍艦の軍備を整え、幕府軍を撃破することになる。

明治新政府には、太政官徴士として、総裁局顧問・外国事務係、参与を拝命。『五箇条の御誓文』の起草に参画。徳川慶喜の寛典を主張。版籍奉還の実現に大久保らと尽力。永世禄 1,800 石を綬禄。明治４年参議となり、廃藩置県を主導・断行して、岩倉使節団の副使として欧米を歴訪する。回覧中は憲法、教育などを中心に思索を続ける。

帰国後の明治６年､憲法制定意見書､内治優先の意見書､元老院設置を主唱。翌７年、文部卿兼務。征台戦争反対を唱え、内務卿も一時兼務。明治８年、地方官会議議長を務めて、地方自治の確立を目指す。病気を押して天皇の奥羽巡幸に供奉。宮内庁出仕。地租改正の緩和、地税減額の建言をなす。明治１０年、西南戦争の最中、天皇の見舞を受けるが「西郷いいかげんにせんか」を遺して逝く。詩や歌にも長じていた。

従一位・勲一等旭日大授章。この人が、もう少し長生きしたら、明治国家ももっと良い方向に行ったかもと思わす人物である。

（２０１５・７・３０　木戸孝充年表　木戸孝充館　明治三傑「木戸孝充」等）

３　大久保利通　（おおくぼ　としみち）1830 - 1878　薩摩　42 歳　副使・大蔵卿

維新三傑　不評を畏れず沈思黙考して明治国家の基礎を築いた大政事家

不人気の人である。だが、この人と西郷がいなければ、明治維新の実現は難しかった。

薩摩藩士・琉球館附役・大久保利世の長男として鹿児島の加治屋町に生れる。

幼名：正袈裟。通称：正助。諱：利済。のち利通。下加治屋町の郷中と藩校・造士館で、西郷隆盛、税所篤、吉井友実、海江田信義らと学ぶ。１６歳で藩の記録所書役助となるが、２１歳の時、父利世が、藩主島津斉興の跡継ぎをめぐるお家騒動（高崎崩れ）に連座して沖永良部島へ流罪となり、利通も免職となる。嘉永６年（1853）島津斉彬が藩主となると記録所に復帰、蔵役となる。安政４年、西郷隆盛と共に徒目付となる。この年、早崎ますこと結婚。翌年、藩主・斉彬が逝去すると、藩主・島津茂久の父・忠敬（久光）に、囲碁の相手として接近し、知遇を得る。万延元年、勘定方小頭格。翌年、御小納戸役となり、藩政に参画する。家格も一代新番に。文久２年、島津久光に従って、京都・江戸に向かう。久光より一蔵の名を賜る。御側役兼小納戸頭取となり、岩倉具視と公武合体を目指す。江戸では、幕府の文久の改革に尽力する。文久３年、薩英戦争に参画。将軍後見職・徳川慶喜の参与会議解体から、慶喜批判を強め、長州再征反対に転じ、薩長同盟、薩土同盟、倒幕、大政奉還へ向かう。この頃、利通に改名。慶応３年、王政復古クーデター断行し、小御所会議で、岩倉、西郷と慶喜の辞官納地を強行決議する。

明治新政府に徴士で内閣事務掛となり、幕府との開戦を主張。大阪遷都建議するが、天皇と面会し、関東親政を建議。版籍奉還を木戸・板垣と協議・推進する。明治２年、参与・参議となる。明治４年、廃藩置県を布告後の岩倉使節団派遣に副使として参加し、欧米の政治・経済システムの吸収に努める。条約改正の天皇委任状を取りに米国から、伊藤博文と一旦帰国するが、条約交渉は中断となる。英国の産業革命の実態を見聞し、プロシアのビスマルクに会い、生々しいパワー・ゲームの実態を知る。帰国後は、征韓論を押さえ内治優先を旨とし、内務省を創設して殖産興業に腐心する。武士の反乱たる佐賀の乱や西南戦争では、維新崩壊になりかねないと、仮借のない態度を取った為に、評判は必ずしも芳しくない。然し、琉球処分の前提となる、台湾出兵、日清互換条約など領土画定のため徹底的に政治リアリズムを貫いたことは、不退転の政治家として歴史家の評価は高い。海運・内務省の強化。内国博覧会を西南戦争中も開催するなど、明治１１年に紀尾井坂で暗殺されるまで、専制的且つ開発独裁的（有司専制）とも評されたが、明治国家のあるべき国のかたちを求めて自分の信じる政治理念を最後まで追求した真の政治家であった。死後、借金しか残さなかった清廉さも忘れられない。

（２０１５・７・３１　勝田政治の大久保利通年表、大平忠氏『大久保利通』等）

４　伊藤博文（いとう　ひろふみ）1841 - 1909　長州　31 歳　副使・工部大輔

明治の今太閤　虚心に国家の為の政治を目指した初代総理大臣

吉田松陰に「斡旋の才あり」と言われたが、生涯、その才を遺憾なく発揮した。

長州周防の百姓・林十蔵の長男に生まれた。幼名 : 利助、のち俊輔、博文。号 : 春畝。滄浪閣主人。父が蔵元付中間・水井武兵衛の養子となり、その武兵衛が足軽・伊藤弥右衛門の養子となったので、十蔵・博文父子も足軽となれた。松下村塾に学び、松陰の配慮で、京都・長崎へ旅行。桂小五郎の従僕となり、江戸屋敷に住み、志道聞多（井上馨）と親交する。安政の大獄で松陰が斬首されると遺骸を引き取る。桂、久坂玄瑞、高杉晋作、志道らと尊皇攘夷運動に関わり、公武合体派の永井雅楽の暗殺を画策。御殿山・英国大使館焼き討ちや塙思寳ら暗殺に加わる。文久３年、長州五傑の英国留学に加わり、ロンドンで英語など学び、米英仏蘭四国連合艦隊の長州攻撃の報に接し、急遽志道聞多と帰国して、戦争回避を英公使オールコックや通訳サトーらと会見して模索するが結局下関戦争は勃発し、一転戦後処理などにあたる。第二次長州征伐では、高杉の功山寺挙兵に一番に駆けつけ、騎兵隊として内訌を戦う。明治維新になると、外国事務総裁の東久世通禧に見出され、神戸事件・堺事件の解決に奔走し、出世の足掛かりを得る。

維新後に、博文に改名。英語を武器に、とんとん拍子に参与、外国事務局判事、大蔵兼民部少輔、初代兵庫県知事、初代工部卿、宮内卿など要職を歴任することになる。明治３年から翌年にかけ、芳川顕正、福地源一郎らと渡米し、ナショナルバンクで学んで帰国、新貨条例を制定。岩倉使節団に副使として参加し、サンフランシスコで「日の丸演説」をして名を挙げる。大久保利通と共に、条約改定交渉の委任状を取りに帰国し、以降大久保の信頼を得る。帰国後は留守政府の征韓論を契機に、明治６年の政変を画策し成功する。明治８年には、大久保・木戸との仲を取り持って大阪会議を実現。明治１４年の政変を主導して、自由民権派を抑え、漸進的に憲法制定・国会開設をすすめるため、明治１５年西園寺公望、伊東巳代治らを伴い、憲法調査に渡欧して、グナイスト、モッセ、シュタインなどに学んで帰国する。明治１８年初代総理大臣に就任し、その後、夏島に籠って、伊東、金子堅太郎、井上毅らと大日本帝国憲法の草案を練り、枢密院を創設して審議し、明治２２年、憲法発布に漕ぎつける。その後も、日清、日露戦争を経て，対露宥和政策をとり、金子を米国へ派遣し、広報外交を演出。明治３３年、立憲政友会を創設。初代韓国統監など務め、明治４２年、ハルピン駅で暗殺されるまで、岩倉・大久保なきあとの明治日本の政治を先導して生涯を終える。最近は、知の政治家との評価が高い。　　（２０１５・８・３　泉三郎、瀧井一博氏ら著作参考）

５　山口尚芳（やまぐち　なおよし）1839 - 1894　佐賀　３３歳　副使・外務少輔

岩倉使節団４副使の内、唯一全行程を岩倉大使と行動を共にした副使使節団副使としては、地味で目立たないが大隈重信の代理として、佐賀藩を代表した。

天保１０年、佐賀藩武雄領で、山口形左衛門尚澄の子として生まれる。通称：範蔵。ますか。ひさよし。とも読む。佐賀藩武雄前領主：鍋島茂義に見込まれて、１５歳の時佐賀藩主：鍋島閑叟の命で、他藩士らと長崎に蘭学・オランダ語を学ぶ。更に、佐賀藩の大隈重信、副島種臣らと長崎英語伝習所（済美館）でフルベッキより英語を学ぶ。

帰藩後、翻訳方兼練兵掛を命ぜられる。幕末には、薩摩・長州藩士らと交流し、薩長同盟にも関与し、京都では岩倉具視とも交流を深める。王政復古の後、東征軍に参加。江戸城開城に際し、薩摩藩・小松帯刀らと一番乗りで入城を果たしている。

明治維新政府には、外国事務局御用掛で出仕。外国官、大阪府判事試補、越後府判事、東京府判事兼外国掛、外国官判事として箱館府在勤など明治元年一年の内に歴任する。明治２年、長崎に赴き、フルベッキを東京の大学へ招聘の任にあたる。次いで、外国官判事兼東京府判事として通商司総括となる。更に会計官判事に転じ大阪府在勤となるが、直ぐに大隈重信の配下の大蔵大丞兼民部大丞に任ぜられる。以上は明治２年のこと。

明治３年、北海道開発御用掛を命じられるが、翌４年外務少輔に転じて、岩倉使節団の副使として欧米回覧の旅に出る。岩倉大使と大隈重信の配慮だろう。回覧中に大隈重信宛に１６通の書簡を送り、回覧の見聞を詳細に報告している。英国の産業を見て、「惜しむらくは十有五年前、この大形を一観せば方略無きにしも非ず、嗚呼遅れたり遺憾なり・・表皮之開化論等は断然打ち捨て根基を強くし人知の進歩を図るが肝要・・」などの所見を述べている。山口の従者は３人いた。息子・山口俊太郎（９歳）、相良猪吉（大隈重信の甥）、川村勇（１４歳、静岡出身、帰国後１８歳で死去）の三名である。
長男俊太郎は、岩下長十郎と共に「使節団一行中の二神童」と呼ばれ、回覧中に通訳を務める程に語学習熟し、イギリスに残って大学を卒業して９年後に帰国した。

帰国後の山口尚芳は、明治６年の政変では当然、外遊組に組みし、佐賀の乱では、元藩主の鍋島茂昌を説いて、反乱へ呼応を阻止し、自ら兵を率いて反乱軍の鎮圧にあたる。以降、元老院議官、元老院幹事、会社並組合条例審査総裁、会計監査院初代院長を歴任。明治 14 年の政変で一旦大隈に準じるが、直ぐ参事院（内閣法政局の前身）の議官・外務部長兼軍事部長。戒厳令・清韓両国在留の御国人取規則、徴兵令改正案などの元老院回付の内閣委員（明治 15 年）、高等法院陪席裁判官、貴族院議員を歴任した。正三位勲一等瑞宝章。現在も、武雄市では毎年一月には「範蔵（尚芳の通称）まつり」が開催されている。（２０１５・８・５、「近代国家への船出―山口尚芳」、ＨＰ崎陽など）

６　田邊太一（たなべ　たいち）1831 - 1915　幕臣　41 歳　一等書記官・外務少丞

三回の洋行経験あって岩倉使節団の大番頭（一等書記官長）

幕臣、新政府官僚、晩年の自由人・三代を自在に生きた人生の達人というべきだろうか。

幕臣の儒学者・田邊石庵（誨輔）の次男として生まれる。通称：定輔。号：蓮舟。父・石庵は昌平黌教授、甲府徽典館学頭を務め、榎本武揚はその私塾生であった。１５歳で甲府徽典館に入学、１８歳、昌平黌に学び、２１歳で父と同じ甲府徽典館教授、次いで２４歳で同学頭を務めることになる。２５歳にはオランダ語を学び始めて、安政４年、長崎海軍伝習所の第三期生となる。伝習所閉鎖に伴い、一年で江戸に戻り、幕府外国奉行所に召され、外国方、書物方出役として、外国奉行・水野忠徳の下で、横浜開港事務に携わる。この頃から、オランダ語に加え、英語、フランス語も学び始める。

文久元年には、厄介の身分から幕臣（３０俵）に取り立てられ、水野忠徳・小笠原諸島開拓使の島調査、測量の随行として、支配調役並で参画。その後の小笠原日本領有の基礎となる。文久３年には外国奉行支配組頭に昇進、池田長発・外国奉行の遣仏使節団に随行する。この時は、横浜鎖港交渉が目的で、ナポレオン三世にも謁見したが相手にされず、逆にパリ約定を結ばされて帰国後、池田使節と共に横浜鎖港談判失敗の責で免職、謹慎処分を受ける。翌年、逼塞の身ながら出役を命ぜられ、支配組頭勤方となる。

慶応三年、正式に組頭に復帰し、徳川昭武パリ万博使節団の随行を命ぜられる。公使館書記官として、幕府と薩摩藩の二重出品のもめごと処理にあたるが、薩摩藩は琉球国太守政府として譲らず、幕府の威信失墜として咎められる。帰国すると幕府の大政奉還後で、目付となって、小栗忠順らと徹底抗戦を唱えるが徳川慶喜に聞き入れられず、榎本武揚を支援に回る。明治二年、徳川家駿府へ移封の後、沼津兵学校の教授に招聘されるが、翌年、外務省外務少丞を拝命して、翌年の岩倉使節団に筆頭の一等書記官長として随行を命じられる。帰国後は、外務省四等出仕となり、明治７年の台湾出兵問題の処理で、大久保利通の随行員の一人として清へ渡り、折衝の補佐をなす。

明治１０年外務省大書記官となり、翌年から清国公使館勤務、明治１３年清国臨時公使となる。明治１６年、５２歳で外務省を退官。その後は、元老院議官、錦鶏間祇候。勅撰貴族院議員などを歴任する。晩年は、詩文、書に親しみ、福地源一郎と花柳界によく遊び、市川団十郎や三遊亭圓朝を自宅に招くなど派手に立ち回った。『幕末回顧談』を残している。琵琶湖疏水を設計・施工した田邊朔郎は甥で、長女・龍子は三宅雪嶺の妻となり、後には三宅花圃の名で、歌人・小説家・随筆家として活躍し、樋口一葉にも影響を与えた。（２０１５・８・１１　蓮舟のつぶやきの年表―田邊康雄参考）

７　何　礼之（が　のりゆき）1840 - 1923　幕臣　32 歳　一等書記官・外務六等出仕

唐通事から英学に華麗に転じて維新の人材を多数育てる

明敏に時代を読み、幕末維新の幕臣、官僚、教育者、翻訳家として大活躍。

代々の長崎唐通事・何栄三郎（静谷、三良太、英八郎）の長男として、長崎に生れる。通称：礼之助。が　‘れいし’とも呼ばれる。天保１５年父の死で、５歳で家督を継ぎ、唐通事は稽古通事に始まり，小通事助過人、小通事助、小通事末席へと進む。１０年間は中国語（唐話）を修めたが、安政元年（1854）の開国後、英語の習得の必要性を感じ、唐人から華英辞典を求め、独学で英語を学ぶ。安政５年の日米修好通商条約締結後、長崎に英米船の寄港が増えると、安政６年には幕府から税関業務を命じられ、積極的にウィリアムズ、リギンズ、マックゴアナ等英米人に接触して英語を学ぶ。長崎英語伝習所ではフルベッキからも学び、後に教師を務める。文久元年のロシア船対馬占拠事件で、通訳を勤めて、長崎奉行所支配定役格の幕臣となる。英語稽古所の学頭となるとともに、自宅で私塾を開き英語教育に当たる。塾生は百数十名に及ぶ。前島密、高橋新吉、前田正名、芳川顕正、高峰譲吉、白峰駿馬、陸奥宗光、中島永元、瓜生震、日下義雄、山口尚芳、萩原三圭らが学んだ。慶応３年、幕府開成所教授職並、軍艦役主格海軍色伝習生徒取締を務める。

明治になると、新政府開成所御用掛を拝命。星亨など学ぶ。次いで大阪の造幣局判事となるや、中之島で瓊江塾を開き、浜尾新、奥山政敬、豊川良平、鮫島武之助などを教えた。大阪洋学校教務を兼務し、洋学校を設立する傍ら、『経済便蒙』『西洋法制』を翻訳。明治３年、大学少博士となり、明治４年の岩倉使節団へ一等書記官六等出仕で参加する。米国務省での会見には、塩田三郎が通訳、何礼之は英和文対照翻訳にあたる。

ワシントン滞在中は、木戸副使に随行して政治調査をし、モンテスキューの『法の精神』を翻訳し、『万法精理』として刊行した。木戸と共に帰国する。

帰国後は、補駅逓寮五等出仕、補内務省五等出仕、記録翻訳事務可相心得事、各国条約改正為取調外務省出頭、台湾蕃地事務局御用掛、内務省・会社条例取調、図書局第三局長、翻訳課長、任内務権大丞、内務権大書記官、図書局長、内務省取調局事務取扱、任内務大書記官を歴任して、明治１７年には、内務省内局第二課兼務で、任元老院議官となり、年俸３千円を下賜。内務省御用掛兼務となる。明治２０年高等法院予備裁判官。明治２１年東京市参事会員当選。２３年錦鶏間祇侯。２４年には勅選貴族院議員に任ぜられる。翻訳著書多数。『民法論綱』（ベンサム）、『政治略原』『開知叢書人事進歩編』『開知叢書人事退歩編』『法律類鑑』『世渡の杖』『英国賦税要覧』など。

（２０１５・８・１２　『長崎唐通事何礼之の英語習得』－許海華著、ほか）

８　福地源一郎（ふくち　げんいちろう）1841 - 1906　幕臣　一等書記官・大蔵書記

洋行四回　政治家　作家　劇作家　ジャーナリスト　歌舞伎座を創設

福澤諭吉と『天下の双福』と言われた男のセカンド・ベストな生き方とは。

長崎の儒医・福地源輔（苟庵）の長男として長崎に生れる。幼名：八十吉。号：桜痴。漢学を長川東洲に、蘭学を名村桃渓（八右衛門）に、英語の読みは森山多吉郎（栄之助）に、英語の発音は中浜万次郎に教わる。福澤諭吉も英語をこの二人から学んでいる。

江戸に出て、外国奉行支配通弁御用雇となり、翻役に従事する。万延元年御家人に任用され、文久元年（1861）の竹内下野守遣欧使節に通詞で福沢諭吉らと参加し、ロシアとの国境画定交渉に携わり、再び、慶応元年（1865）には柴田日向守遣仏使節に随行し、仏人ロニーからフランス語を学ぶと共に西洋の新聞、演劇、文学に目を開く。

帰国した慶応２年、外国奉行支配調役格・通詞御用頭取（蔵米１５０俵３人扶持）の旗本となるが、開国論が受け入れられず悶々とする。大政奉還の際は、徳川慶喜大統領の新政府構想を上奏するが取り入れられず。江戸開城後、『江湖新聞』を創刊。新政府を薩長政府と非難し、発禁処分で逮捕されるが、木戸孝充のとりなしで無罪放免となる。暫くは、戯作・翻訳と私塾・日新舎で英語、仏語を教えて生計を立てる。この頃、吉原の芸妓・桜路に因み桜痴を号す。明治３年、伊藤博文の渡米調査団に誘われ、会計調査にあたる。明治４年の岩倉使節団に一等書記官として米欧視察、途中から別命を受け、トルコ、エジプトの立会裁判所交渉（領事裁判）を視察して帰国する。明治７年、大蔵省を辞し、政府系『東京日日新聞』に入社し、署名入り社説を創設、発行部数を増やす。政府の漸進主義を支持し、御用新聞と言われる。だが、明治８年の新聞紙条例・誹謗律が発布されると、新聞各社の要望書を起草。同年の地方官会議の議長・木戸孝充を助け、書記官を務め、西南戦争では従軍記者となって報道。明治天皇に戦況報告などをする。

渋沢栄一と東京商法会議所を設立し、府会議員となり議長を務めるなど、地方民権論で漸進的立憲主義の急進・理想は追わず、不完全でも現実的な対応＝セカンドベストの美学を説く。明治１２年頃より、演劇や文学活動に傾倒していく。新しい演劇をめざし、英・仏の戯曲・小説を翻案して、河竹黙阿弥や三遊亭圓朝に提供すると共に、演劇改良運動を展開する。明治２０年頃より、歴史的著作を著す。『春日局』（1891）、『関原誉凱歌』（1892）、『尊号美談』（1887　光格天皇）、『天竺徳兵衛』（1892）、『山県大弐』（1892）、『車善七』（1901）、『幕府衰亡論』（1892）など。その他、歌舞伎座を創設して、市川団十郎の座付き作者など多数の戯作・小説・風刺ものを著す。人生多毛作を実践。

（２０１５・８・１２　五百旗頭真『福地桜痴論』、大久保啓次郎『天下の双福』他）

９　塩田三郎（しおた　さぶろう）1843 - 1889　幕臣　２９歳　一等書記官外務大記

幕末維新で有数の英語・仏語通訳官　琉球問題を処理

天保 14 年、江戸で塩田順庵の三男として生まれる。通称：篤信。号：松雲。
宮川家に養子に出されて、宮川三郎を名乗る。兄病没して、再び塩田姓へ戻す。
函館で栗本鋤雲に漢学を学び、メルメ・カションにフランス語を、英語通詞の名村五八郎（1826 - 1876）の門下生として英語を学ぶ。名村五八郎は万延元年の新見豊前守遣米使節団に函館奉行支配定役格通詞で、条約批准の日本人初の使節団に随行していて、その配下に立石得十郎, 斧次郎父子がいた。又、カションは、１８５９年函館に赴任し、栗本鋤雲、塩田三郎、立広作らを教えた。当時の函館では、新見使節団の副使だった村垣範正が外国奉行兼函館奉行を務めており、幕府の蝦夷地開発の一環で、米国公使タウンゼント･ハリスに依頼して、米国地質学兼鉱山学士のパンペリー（Raphael Pumpelly）とブレイク（William Brake）を招聘して函館鉱山学校を作り、武田斐三郎（諸術調所教授）、大島惣左衛門高任（蕃書調書出役教授）が共に蝦夷全域の鉱山調査にあたっており、その通訳に抜擢されたのが塩田と立広作であった。この鉱山調査は文久元年から同３年まで続き、新政府の北海道開拓団が発足する１０年前のことである。

文久３年、横浜鎖港談判のため池田筑後守遣仏使節団が派遣されると、塩田は調役格・通弁御用出役で尺振八（のち共立学舎創設）と共に起用された。この使節団には、田辺太一、益田鷹之助、孝父子も参加している。このころ仏国公使から公使館付通詞に塩田を雇いたいと懇請されたが、幕府は日本側の必要人材として断っている。元治２年（1865）幕府が設置した全寮制・横浜仏語伝習所は校長がカションで、塩田が助教授に起用された。　慶応３年（1867）外国奉行支配組頭に登用。

明治維新後は、民部省に出仕して民部権少丞、のちに外務省に転じて外務大記となる。明治４年の岩倉使節団には、最初から発令はあったものの、どういう事情か、後発して単独で渡米し、ワシントンで本体と合流してフィッシュ国務長官との最初の条約交渉に間に合い、通詞を務めている。

帰国後は、外務大丞、その後外務少輔を歴任して、もっぱら井上馨外務卿の配下で、条約改正交渉の補佐として尽力する。明治１８年（1885）には、特命全権駐清公使に任命されて、明治１９年（1886）から明治２２年まで清国に駐在する。明治２２年、北京で客死する。近年中国は、琉球問題に関し「１８８７年、曾紀澤･総理衛門大臣が、当時の塩田三郎公使に対し、まだ琉球問題は決着が付いていないと提起したのに、塩田公使は、‘日本がすでに領有済み’と取り合わなかった」とクレームをつけている。
（２０１５・８・１３　地学団体研究会北海道支部、泉三郎著作など）

１０　渡辺洪基（わたなべ　ひろもと）1848‐1901　越前　２５歳　二等書記官

明治国家のプランナーとして八面六臂の活躍　東京帝国大学初代総長

『二人の知の政治家―伊藤博文と渡辺洪基』（瀧井一博）と評価が極めて高い。

福井藩医の渡辺静庵の長男として越前に生れる。幼名：孝一郎。号：浩堂。２歳の時、福井で最初の種痘を父より受ける。１０歳で、立教館に入学。更に福井の済世館に学ぶ。１８歳で江戸に出て、佐倉の蘭学者・佐藤尚中（舜海）に理学を学ぶ。開成所・箕作麟祥や慶応義塾・福沢諭吉に英学を学び、のち会津藩・米沢藩で英学校を開く。慶応３年、西洋医学所出仕、英蘭句読師を務める。維新後、東京に出て、新政府に国民皆兵や殖産興業を唱える。これが岩倉具視の目に留まり、明治２年、大学南校の助教に登用される。医術を離れて、語学力、数理力、組織力を次第に発揮する。明治３年、外務大録で出仕。翌年、岩倉使節団に外務大記で随行するが、条約交渉が始まると、早期改正は国力を損なうと、辞表を出して帰国してしまう。だが、免職にはならず、琉球使臣接待係を経て、オーストリア兼イタリヤ公使館二等書記官として、新婚の妻・貞子と同伴赴任。妻にはドイツ語と英語を習わせ、皇帝ヨーゼフ一世の前で、妻に琴・三味線を演奏させる。公使佐野常民の帰国の後、一等書記官・臨時代理公使となる。任期が終わると、自費で英・露・トルコ・印度を周遊して帰る。明治１１年、学習院次長として学内規則を整備、商工業の整備の為の鉄道整備と博物館建設を説く。一時官を辞し、新聞記者の原敬と１０か月間日本一周の旅に出る。明治１２年、榎本武揚、鍋島直大、佐野常民らと謀って、東京地学協会を創設し社長に北白川能久親王を迎える。明治１３年、太政官法制部主事として「集会条例」を起草する。明治１５年、元老院議官に（１７年まで）。１７年、工部小輔。明治１８年、東京府知事。明治１９年、帝国大学令に伴い、東京大学と工部大学校を合併した帝国大学初代総長を、伊藤博文、森有礼の懇請で引き受ける。渡辺の一番の功績は、明治２０年創設の「工手学校」だろう。「将を助け，卒を導く下士官」たる職工を育てて、技術立国を目指そうと、ジョサイア・コンドルの協力と、岩崎弥之助（３０００円）、澁澤栄一（２００円）の寄付を得て、辰野金吾（ロンドン帰り）、古市公威（パリ帰り）中村貞吉（イギリス帰り、化学者―校長）榎本武揚、大鳥圭介、田口卯吉などの講師陣で、８００人応募から２２８名を選び、土木、機械、電工、建築、造船、採鉱、冶金、化学の八科目を設けた。明治２３年駐オーストリア兼スイス公使。実業でも、両毛鉄道社長、関西鉄道、帝国商業銀行、芝銀行重役。慶応義塾評議員。大倉商業学校督長。衆議院議員。貴族院議員。立憲政友会設立委員等まさに八面六臂の働きをして、５４歳で死去。鹿鳴館では妻とダンスに興じた。

（２０１５・８・１４「西洋文化との出合い―渡辺洪基」（白崎昭一郎｝コトバンク等）

１１　小松済治（こまつ　せいじ）1848 - 1893　紀州　２５歳　二等書記官外務七等

ドイツ留学生第一号　医学から法学へ　グナイスト『法治国家』を翻訳

出生は江戸、会津藩命でドイツ留学、出身地が紀州という数奇の理由は？

祖父馬島瑞延、父馬島瑞謙は会津藩医で、その長男として江戸で生まれる。先祖は千葉と和歌山出身の小松姓と言われる。祖父の代に、馬島流の眼科を学び、師を凌駕する技量で馬島姓を名乗ることを許されたが、同門生の妬みを買って全国巡遊を余儀なくされ、偶々、会津に寄った時に、藩主松平容敬の眼病と皮膚病を治したことで、藩医に取り立てられた。済治は１８５９年父の死で家督を継ぎ、会津に出て藩校・日新館で南摩綱紀（後の東大教授）、杉原外之助に学び、次いで、蘭学所で、山本覚馬や川崎尚之助に蘭学を学ぶ。慶応元年、会津藩命の蘭学修行に長崎に出て、西洋医学校「精得館」でオランダ医学を学ぶ。禁門の変（1864 年）での鉄砲よる負傷兵の治療研究が目的だったと言う。長崎で知り合ったドイツ商人カール・レーマンが済治の人生を開いた。レーマンにドイツ語を学び、慶応３年には、このレーマンを通じ山本覚馬は、撃針銃（後装ライフル銃）４３００挺（会津藩１３００、和歌山藩３０００）の発注契約を結んだ。この買付で帰国するレーマンに随行して、藩命で済治はドイツ留学に出る。１８６９年にハイデルベルク大学に学籍登録して、医学と後に法学を学んでいる。追ってドイツ留学生となった赤星研造と青木周蔵に先立つこと一年前のドイツ留学生第一号であった。

明治３年に帰国したが、会津藩は戊辰戦争に敗北していたので、父祖の地・和歌山に戻って、馬島済治から、先祖の姓の小松済治に改名した。この頃、小松は会津藩出身の日下義雄と会って大阪造幣寮頭の井上馨に紹介して、日下を書生としてもらった。後に、小松は日下（長崎県知事）の仲人もしている。紀州藩に出仕して軍制改革など指導していた小松は、明治４年、兵部省に出仕し、二等書記官となって岩倉使節団に随行した。アメリカより大久保、伊藤の二人に伴って、天皇委任状を取りにいったん帰国した。その時、岩倉大使より、天皇の御真影（写真）を、各国歴訪に使いたいので貰って来いと頼まれていたが、宮内省は馬上洋服姿の披露できるような英姿写真はまだ撮れていない（天皇は写真嫌いでなかなか応じてくれない）と結局, 再渡米までに間に合わなかった。

帰国後の明治７年に陸軍省に出仕、翌年判事になるが、明治１２年、いったん官を辞して、ルドルフ・フォン・グナイストの『法治国家』を『建国説』として翻訳出版した。明治１８年、司法省書記官に復帰、明治２０年、民事局長、明治２４年、横浜地方裁判所長を歴任したが、４７歳で亡くなっている。（２０１５・８・１４　荒木康彦『近代日独交渉史研究序説―最初のドイツ留学生馬島済治とカール・レーマン』他）

１２　林董三郎（はやし　とうさぶろう）1850 - 1913　幕臣　２２歳　二等書記官

日英同盟締結に尽力し、日露戦争を優位に導く　のち日本初大使

佐倉藩蘭医・佐藤泰然の五男として生れる。幼名：信五郎。通称：董（ただす）、変名：佐藤東三郎。文久２年（1862）、幕府御典医・林洞海（実姉の夫）の養子となって、林家を継ぎ、林董三郎を名乗る。横浜のヘボン塾（アンナ・ヘボン、明治学院大学の前身）にて英語を高橋是清、益田孝、村田蔵六（大村益次郎）らと共に学ぶ。

慶応２年（1866）、幕府の英国留学生として、中村正直、菊地大麓、外山正一ら１３名で渡英し、２年間学んで慶応４年、戊辰戦争の最中に帰国するが、幕府海軍副総裁の榎本武揚（林洞海の娘・多津の夫）に従って、佐藤東三郎の名で開陽丸乗組見習として、函館赴き五稜郭に立て籠もる。敗戦後は捕虜となり、弘前藩預かりとなる。この間に、榎本がパークス宛に出した英文の書簡が、パークスも英国人の手になるのかと驚くほどの出来で、それが林の手腕と知った黒田清隆、陸奥宗光から地方官僚へ登用の要請が来る。林は「仲間の捕虜も一緒でないと新政府には出仕しない」を条件に禁固処分を解かれて、明治４年横浜へ戻り、神奈川県奏仕で出仕し、陸奥宗光神奈川県知事の配下に就く。同年、二等書記官兼外務省七等出仕に任じられ、岩倉使節団に随行することになる。

使節団が米国で長居している間に、先に渡英して、使節団がリバプールに入港した時、吉田清成、大鳥圭介らと出迎えている。帰国後は、伊藤博文工部大輔の下で、工部省工学寮工学助として、工学大学校創設に働く。工部寮少丞、工部省権大書記官、同大書記官、奏任四等宮内省大書記官兼帯を歴任し、明治１８年、工部省廃止に伴い、逓信省大書記官に転じ、翌年、第一次伊藤内閣・榎本武楊逓信大臣のもと、高等官二等逓信省駅逓局長、同省内信局長を経て、香川県知事、次いで兵庫県知事に転じる。再び、明治２４年、第一次松方内閣・榎本外務大臣の時、高等官一等外務次官となり、明治２８年、清国駐劄特命全権公使を皮切りに、ロシア、スエーデン、ノルウエー、英国全権公使を歴任する。その間、大臣への要請もあったが、「にわか大臣たらんより、外交の檜舞台に立たん」と現場を重視した。英国公使の時、イギリスよりロシア重視の伊藤博文、井上馨、桂太郎を説いて日英同盟締結に尽力し、結果これが日露戦争の展開を優位に導き、日露戦争後の戦後処理では、義兄の加藤高明の後の外相として活躍した。英国公使の時、大使に昇進。これは日本人外交官として初の大使である。この後、逓信大臣も経験しているが、林の人生は外国体験と語学能力が人生を切り開いた好例だろう。翻訳『経済論』（スチュアート・ミル）。第二代電気学会会長（1908 - 1911、初代は榎本武揚）。伯爵。

（２０１５・８・１５　生涯”働・学・遊“水雲会の『林董三郎』など）

１３　長野桂次郎（ながの　けいじろう）1843 - 1917　幕臣　２９歳　二等書記官

幕末の遣米使節団で一躍人気となったトミーこと為八も、岩倉使節団以降は不遇だった。

幕府直参旗本・小花和度正（こばなわ　なりまさ）の次男として生まれる。幼少時、病弱だったので、豪農・横尾金蔵の里子養子となり、横尾為八となる。１０歳で、母の実家・米田猪一郎の再養子になり、米田為八を称す。１６歳、叔父でオランダ通詞の立石得十郎の養子に入り立石斧次郎として蘭語と英語を立石得十郎と長崎・蘭語通詞の森山多吉郎より学ぶ。二人は、ぺり―来航時の通詞を下田で務めており、ロナルド・マクドナルドより英語を学んでいた。斧次郎は英語を二人から学ぶと共に、米国総領事館に出入りしてハリスとヒュースケンから生きた語を学んだ。更に、長崎の英語伝習所に入り、教師のオランダ海軍二等尉官ヴィッヘルスと英国人フレッチェルの助手を務めた。

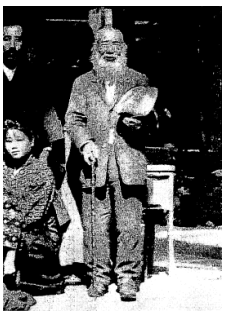
安政６年（1859）神奈川運上所通弁見習に登用され、万延元年の日米修好通商条約批准の新見遣米使節団に養父・立石得十郎と共に親子で随行する。米国では、若くて気さくで英語の出来る斧次郎は、トミーと呼ばれて婦人たちに大人気を博し、新聞でもてはやされ、トミーポルカの楽曲さえ作られた。帰国後は、米田桂次郎を名乗り、十人扶持御雇通詞で出仕し、暗殺されたヒュースケンの代わりに米国領事館通訳として働き、ハリスの依頼で『孟子』の翻訳など手掛けたが 1862 年ハリス帰国で、外国奉行御書翰掛・開成所（洋書調所）教授職並出役として、田辺太一の下で福沢諭吉らと働いた。

一方、私塾を田辺の家で開き益田孝らを教える。徳川慶喜が大阪城で米国公使ファンケンバーグと会談の際は将軍親衛隊の歩兵差図役頭取勤方であったが、通訳を勤めた。そのころ、プロシア人ヘンリー・シュネルと武器調達の為、上海を訪れている。

維新後は、長野桂次郎と６度目の改名をし、明治４年の岩倉使節団の回覧に二等書記官で随行する。だが、米国以降は工部省造船頭肥田理事官付け、工部省七等出仕に切り替えられ、鉱山業務など調査にあたり、佐々木高行と共に一足先に帰国した。帰国後は、工部省に在籍したが、ろくな仕事もなく明治１０年には官を辞し、一家郎党で北海道に移住して、北海道開拓に従事した。度々、伊藤博文などに職の斡旋を頼んでいるが、恵まれなかったようだ。明治２０年ハワイ移民監督官となって、安藤太郎、中村領事らと家族を伴い赴任したが、２年程で戻り、その後は大阪控訴院の通訳官を１８年間ほど務めたが安月給だったようで、最晩年は家族と戸田村に隠棲した。結局、幕末までが長野桂次郎の絶頂期で、新政府になってからは疎んじられたようだ。７４歳で死去。

（２０１５・８・１６　『トミー立石斧次郎（長野桂次郎）年譜』、他）

１４　川路寛堂　（かわじ　かんどう）1844 - 1927　幕臣　２８歳　三等書記官



川路聖謨の孫　大蔵省から英語教師へ

江戸で川路彰常の長男として生まれる。３歳で父が病没し、叔父の井上清直に育てられるが、８歳で川路家に戻り、祖父・川路聖謨の庇護を受ける。通称：太郎。温。

日下部伊三次、安積良斎に儒学を学ぶ。昌平黌に入学。箕作阮甫と蕃書調所で蘭学を、中浜万次郎・森山多吉郎に英語を、横浜仏語伝習所でメルメ・カションに仏を学び，酒井良祐に剣術指南を受ける。吉原重俊、福島敬典らと武田斐三郎に英語、測量術を学ぶ。安政４年、１３歳で元服し、将軍家茂の小姓組番士となる。安政６年、祖父免職に伴い、家督を継ぎ、蕃書調所に勤める。文久３年、将軍上洛に従い、京で佐久間象山に会う。慶応２年、幕府陸軍の歩兵頭並（大隊長格）、同年幕命で英国留学の取締となる。英国では、他の留学生たちはユニバシティ・カレッジスクール中学に通い、川路は文学士モルトベイ氏の個人教授で海軍術・英文学を学ぶ。またパリ出張し、徳川昭武訪仏の支援にあたる。大政奉還後、帰国の費用を断たれ渋沢栄一に相談する。帰国すると、祖父・川路聖謨は自害しており、家財も盗難に遭い無一文となる。維新後、静岡に赴かず平民となって、横浜で生糸の貿易商を営むが失敗する。然し、この間、伊藤博文、川村純義の面識を得、渋沢栄一と田辺太一の推挙で、岩倉使節団に外務七等出仕三等書記官として随行する。米国で、財政出納事務取調の大蔵省七等出仕に切り替わる。オランダでは運河・堤防等の土木工役視察の特命を受け、使節団と各国歴訪して帰国。帰国後は、大蔵省の残務整理、外務省の外国文書課長などを勤めた。明治８年、大蔵卿大隈重信へ金銀比価是正の提言『現貨濫出論』を出し、西洋式簿記にアラビヤ数字採用を建言し、米商会所の設立に参画した。同年、工部省大鳥圭介、大蔵省河野通猷らとタイに出張し、大蔵省で翻訳事業に従事。翌年、大蔵権少丞、叙正七位となったが、明治１０年官制改革で免職となる。その後は、いくつかの実業に挑戦するが失敗。明治１８年より、芝三田台に英語塾『月山学舎』を開き、慶応義塾に入学前の生徒に英語を教えた。明治２６年から明治３２年まで、福山の尋常中学『誠之館』の雇教員となる。更に明治３２年には兵庫・洲本中学校教諭心得を勤める。明治３６年、兵庫県・三原郡組合立淡路高等女学校初代校長を１１年間務める。進歩的な教育方針で、全校海水浴など取り入れ「開明校長」として有名になる。大正３年―１１年には神戸の松陰高等女学校（現松陰女子学院）の副校長を勤めて、以降神戸に隠棲した。８４歳で死去。著書『川路聖謨之生涯』『月山漫筆』『英航日録』等（２０１５・８・１９　『誠之館人物誌―川路寛堂』など）

１５　畠山義成（はたけやま　よしなり）1842 - 1876　薩摩　２９歳　三等書記官

薩摩藩第一次英国留学生　回覧実記・公式記録員　東京開成学校校長

出生が解明されていない。父親は薩摩藩の一所持・加治木島津家・主水久誠との説と、加治木島津家から畠山家に養子に入った畠山伝十郎でその三男が、畠山義成とも言う。一万石の家老にもなれる家格であったようだ。通称：武之助，丈之助　号：純常。

慶応元年（1865)、薩摩藩の１９名の英国留学生として羽島港から渡英する。変名は杉浦弘蔵。ロンドンではジェームス・グラバー（トマス・グラバーの兄）の斡旋で、University College of　London で学ぶ。畠山はデビドソン教授宅に寄宿して英語と西洋教育の基礎を習う。１８６７年、元在日英国公使館でオールコックの秘書をしていたローレンス・オリファントの支援で、吉田清成、鮫島尚信、森有礼、松村淳蔵、長沢鼎ら６人で渡米してトマス・レイク・ハリス教団（コンミューン型宗教集団）に入って、ブドウ園などに従事するコロニーで共同生活を始める。然し、教団の方針に疑問を感じ、１８６８年にはハリス教団を去って、モンソンにいた薩摩藩第二次米国留学生（吉原重俊、湯地定基、種子島敬輔、江夏蘇助、仁礼景範）に合流のため、ニュージャージー洲ブランズウィックへ移住して、畠山と吉田はラトガース大学に入学する。畠山は三年制の科学コースを取る。この年、キリスト教に入信（吉田、湯地、畠山、吉原の順で）し、宣教師を志す。１８６９年には、薩摩藩留学生から新政府官制留学生となる。吉原が普仏戦争見学の大山巌、品川弥二郎らに付いてヨーロッパに派遣されると、畠山は留学生の管理・財政管理役となる。７１年にはヨーロッパの教育制度を調査の上で帰国命令が出る。ラトガース大学は休学し、正式の卒業はならず。亡くなる直前の訪米中に、同大名誉修士号を授与されている。

在英中、岩倉使節団に随行が発令されて、吉原と共にワシントンで使節団に合流、三等書記官を拝命する。米国では久米邦武と共に、米国憲法の翻訳に従事し、木戸とモルレーが参画する。欧米回覧で、畠山が通訳、久米が記録する役目で後の回覧実記の基礎を築く。１８７３年帰国し、暫く大久保利通の家に居候し、開成学校が開校に伴い、文部省と太政官の五等出仕として、開成学校と外国語学校の校長を勤める。宮内庁御用掛も兼務。１８７４年、佐賀の乱で九州出張し、故郷の土を踏む。再び東京に戻ると、文部小丞、学務局長，中督学を務める。ラトガース大学教授のデビッド・モルレーが文部省学監に招聘されると、その通訳も兼ねる。１８７５年、書籍館、博物館の館長となる。

この頃から病気を患い，静養をしつつ１８７６年フィラデルフィア万博に、文部大輔・田中不二麿と共に渡米するが、その帰途の船上で死亡する。34 歳だった。

（２０１５・８・２０　長耳ブログーKOZO-Web.を参考）

１６　安藤太郎（あんどう　たろう）1846‐1924　幕臣　26 歳　四等書記官外務大録

五稜郭闘士から使節団へ　ハワイ総領事　日本禁酒同盟初代会長

大酒豪が日本禁酒同盟会を創設。元麻布の安藤太郎記念教会を妻の遺志で献造。

　鳥羽藩医（江戸藩邸詰）・安藤文沢の子として江戸に生まれる。字：忠経。
漢学を安井息軒に、蘭学を坪井芳州に、英語を箕作秋坪（菊池大麓の父、大麓はロンドンに使節団滞在時、英国で英才の名を馳せており、後の東大総長）に学ぶ。１８歳、神戸海軍操練所、次いで陸軍伝習所に入り、幕府の騎兵となる。慶応３年、品川沖で二等見習として薩摩の軍艦『翔鳳』と対峙して、砲弾を撃ち込み撃退させている。戊辰戦争では、榎本武揚軍に加わり、五稜郭で降伏し、禁固一年を経験している。解かれて新政府の大蔵省に出仕、次いで外務省に転じ、岩倉使節団には四等書記官の外務大録で随行した。帰国後は、専ら外務畑を歩く。香港副領事を務めた後、明治１７年上海総領事。明治２０年にはハワイ総領事として文子夫人と共に赴任する。文子は荒井郁之助（1835‐1909　北海道開拓使学校創設、大島正健、内村鑑三、新渡戸稲造など育て、初代中央気象台長）の妹で、ハワイで太郎と一緒にメソジスト教会で受洗している。当時、ハワイ移民の若者が多く、サンフランシスコから来た同派の美山貫一、鵜飼猛の二人が宣教のかたわら、互助会を作り、福祉・教育活動に力を入れており、日本人教会を設立。榎本武揚逓信大臣と日本郵船社長森岡正純から贈られた二樽の祝酒を、夫人は夫の体を気遣って馬丁に頼んで、樽を割らして捨ててしまった。これを機会に、太郎は禁酒を断行して、ハワイ禁酒会を作る。夫妻は、それまで１７年間海外生活をしていたが、上海に出張の黒田清隆が大酒を飲み、酒乱で大失態を起こし国際問題になりかけた姿を見ており、自らも酒の上の失態に悩んでおり、キリスト教入信もあり覚悟したようだ。

　日本に戻ると、外務省初代移民課長、農商務省商工局長を務めた後、官を辞して、キリスト教の宣教と日本禁酒同盟会（1890）を設立してその普及に専念する。そして、自宅を日本メソジスト銀座教会安藤記念講義所として解放し、夫人が亡くなると、その遺志を継ぎ、大正７年（1918）には、元麻布の自宅の一部に安藤記念教会を設立した。黒田清隆の酒乱は有名で、それをヒントに禁酒同盟を作ったわけだが、実は、五稜郭反乱軍の榎本武揚、荒井郁之助、林董や安藤太郎などの登用に否定的の西郷隆盛を説いて、有為な人材を新政府に積極的に登用・活用すべきと説得したのが黒田である。黒田に導かれた安藤の人生だったかもしれない。

（２０１５・８・２１『日本禁酒同盟―禁酒の使徒　安藤太郎伝』（小塩完次）コトバンクなど参考）

１７　池田政懋（いけだ　まさよし）1846－1881　佐賀　四等書記官

天津領事　大蔵省少書記官　長崎税関長　フランス語の達人

岩倉使節団の本隊に参加した当時超一流の人物でも歳月の経過は無残である。

出自は、佐賀藩出身ということ以外に父母の名前さえ判らない。欧米回覧中は，政懋の名より、池田寛治で通っている。弥一という通称もあった。長崎でフランス語を学んだとされるが、恐らく、師匠は名村八右衛門だろう。新政府には大学助教で出仕。

明治４年５月にロシアとのサハリン島所属問題で、参議・副島種臣と外務卿・寺島宗則がポシェット湾での交渉随行員として、田辺太一、上田畯と共に池田政懋が起用されている。岩倉使節団の随員に選ばれたのは副島（佐賀出身）や田辺の推薦が考えられる。

四等書記官で岩倉使節団には参加している。米国からヨーロッパには岩倉使節団とは先行しているが、佐々木高行の宮内庁メンバーと一緒か、普仏戦争見学の大山巌に随行したかのどちらかだろう。１８７２年１１月２日に、パリのホテルドロールビロンに投宿した成島柳北の『航西日乗』には、同じホテルに池田寛治、阿部潜、佐藤鎮雄、大野直輔、長岡精助が滞在していて、１１月４日に「阿部氏帰国。池田寛治氏に誘われて、市内の浴場に赴く。」８日「昨日岩倉使節団に先行して着いた安藤太郎、池田氏とボアドブロン公園に遊ぶ」１１日「長田、池田、安藤三氏とワランチノの歌舞場を見る」１６日「岩倉大使一行パリ着」２７日「田辺、池田、安藤氏と話す」２月１７日「岩倉使節団一行ベルギーへ発つ」３月１４日「公使館の、池田、長田、鶴田、名村諸氏にイタリア行の挨拶に行く」そして、半月後イタリア旅行からパリに戻った柳北は４月８日「グランドホテルに大久保利通を訪う。明日帰国すると言う。戻って故郷への手紙を書き、池田寛治氏に託す」とある。つまり、池田は岩倉使節団を別れ、大久保に随行して帰国し、パリ滞在中は公使館付け要員になっていた模様である。この大久保とは、明治７年、台湾出兵の後に、台湾の所属問題と出兵の是非を問うために、清国へ全権弁理大臣大久保利通として乗り込んだ時に、法律顧問として随行した仏人ボアソナードの通訳として同行したのが、内務省７等出仕・池田寛治と司法省７等出仕・名村泰蔵であった。二人はボアソナード・大久保の法律論争の通訳と協定案の作成に重用され、交渉を有利に導いた。この清国出張には、吉原重俊租税助、高崎正風議官、田辺太一らと井上毅も司法省で、池田と同じ七等出仕であった。井上は、このあと、とんとん拍子で出征する。池田にとっては、４年後の大久保の暗殺と、明治６年と明治１４年の変による佐賀藩出身者や田辺太一の政府離れが、その後の出世に響いたかもしれない。天津領事、大蔵省少書記官、長崎税関長を務めたが、３５歳で早世した。

（２０１５・８・２２　成島柳北『航西日乗』、『大久保利通日記』その他）

１８　中山信彬（なかやまのぶよし）1842 - 1884　佐賀　30 歳　大使随行兵庫権知事

初代大阪株式取引所頭取　　（致遠館同僚と　中山は右端）

佐賀藩出身の池田寛治と共に、出自が判明しない。中山嘉源太とも称した。読み方は、‘のぶあき’とも読む。大隈重信、副島種臣らと写真にあるように、慶応元年の長崎英語学校「致遠館」の創設に関わっている。当然、フルベッキに英語を学んでいる。

王政復古後、堺県大参事を拝命している。大隈重信の推挙があったものと考えられる。次いで明治３年（1870）、第６代目兵庫県知事に選ばれている。初代伊藤博文、４代陸奥宗光、５代税所篤と何れも大物の役職である。

明治４年、７代神田孝平に引き継いで、岩倉使節団の大使随行に選ばれた。使節団本体の構成では、幕臣出身が８名、長州が４名、佐賀が４名で、薩摩２名を抜く。
使節団の中では、中山は米国から肥田為良工部省造船頭が先導する別動隊（長野桂次郎、阿部潜、沖守固、岩山敬義、大島高任、高辻修長、村田新八ら）９名に加わり、米国の最新鋭の工場施設のあるフィラデルフィアなどを中心に産業視察にも参画した。

帰国して太政大臣あてに『中山信彬報告理事功程』提出している。内容は、イギリスにおける地方行政に関する質疑応答と在清アメリカ領事規則となっている。

帰国後は外務省五等出仕、外務権大丞兼二等法制官、明治８年、正院法務局で古沢滋、牟田口通照らと務めている。古沢滋は土佐出身だが、維新後、英国留学し、議会制度の素晴らしさに目を開かれ、ロンドンで法律を学び議会があるごとに参観した男で、安川繁成に似た行動をしている。前年、明治６年の政変で辞職した江藤、板垣、副島、後藤に、由利公正、岡本健三郎、小室信夫と古沢とで日本最初の政党『愛国公党』を発足した。中山は、このころ佐賀の乱以降の、佐賀県における士族の不穏な動きや県令などの横暴な態度を懸念する手紙を大隈重信に書き送っている。新政府のやり方に疑問を感じて、次第に官に対する執着が失せてきたことが窺える。明治１１年退官して、実業界に転じ、大阪株式取引所初代頭取となる。この組織は、五代友厚、鴻池善右衛門、三井元之助、住友吉左衛門等十名の発議により、資本金２０万円で発足したもので、この件に関しても大隈重信に、こもごも相談しているので大隈と渋沢栄一による配慮の配置転換が想像される。

（２０１５・８・２２　大隈重信宛中山信彬書簡　コトバンク　泉三郎著書、ほか）

１９五辻安仲（いつつじ　やすなか）1845―1906　公家　27　大使随行員　式部助

明治天皇東京行幸の先発隊長　宮内庁式部寮理事功程編、子爵

宇多源氏 200 石、源雅信の子、時方を始祖とする堂上公家半家の名門・五辻家に生まれる。父は正二位・五辻高仲（1808―1886）幕末の八十八卿列参に参加の一人。養父（実の兄）従四位上馬権頭の五辻継仲。安政 5 年元服、昇殿を許され、文久元年正月、従五位上に叙せられる。攘夷の志あり、禁門の変では長州藩に加担し謹慎処分を受ける。

慶応 3 年 12 月王政復古で三職書記御用掛となり、明治元年には西郷吉之助、大久保一蔵、桂小五郎、井上聞多、伊藤俊輔、大隈八太郎、五代才助、三岡八郎、後藤象二郎、横井小楠らと同列の参与となり、国内事務局権判事を拝命、明治 2 年、東京・招魂社の創建には、天皇勅使を務めている。明治 4 年 8 月 29 日には、明治天皇の東京行幸の先発隊として、戸田忠至と共に京都を発っている。次いで函館裁判所弁も兼ね、旧官制の弾正大弼、少弁を歴任し、式部助として岩倉使節団の大使随行として加わる。

五辻は、回覧中は侍従長・東久世通禧理事官随行で、村田新八と通訳池田寛治らと行動を共にしている。

明治 5 年帰朝、「宮内庁式部寮・理事功程」を理事官・東久世通禧と連名で提出している。式部助従四位の時、『神社祭式』を編纂している。明治 9 年 3 月には、式部助を辞任しているが、その後も、宮内庁御用掛を務めていたことが、明治 20 年の「女子教育奨励会会員名簿」の記載に見える。三條実美文書に、五辻書簡があり「叙位進階内規両様・華族叙位進階内規」の清書提上（明治 20 年）したことが記録されており、その中で「昨日、言上せし件、早速ご処置・・貧窮華族に寛大な憐憫・・(に深謝の辞)」（明治 23 年)、又「内命の京都華族の内、油小路、高丘然るべし、高丘人物なり」(年不詳）等の書簡が残り、三条の華族問題処理・人物評価の相談役になっていたことが窺える。

明治 22 年－26 年は大膳太夫を務め、天皇の側近に努めている。

1884―1906 年子爵。京極家 14 代の京極高致（1869―1893）は、五辻安仲の次男で京極家に養子入りして、やはり子爵となっている。

（２０１４・１１・２５　三条実美文書、明治維新人名事典、美術人名事典　）

２０　野村　靖（のむら　やすし）1842－1909　長州　30　外務大書記

吉田松陰最後の同志、『留魂録』現存の恩人　廃藩置県を提案

野村靖は、1842 年（天保 13 年）長州藩萩の下級武士（足軽）入江嘉伝次の三男として生まれる。名は和作、靖之助、号は欲庵。兄の入江九一が入江家を継いだため、野村家（扶持方二人＝米２石４斗）の養子となり、吉田松陰の松下村塾に入門して、松陰に「才気あり、読書好き」と評される。尊王攘夷運動に傾倒し、松陰の最後の賭けである≪大原重徳西下策≫≪伏見要駕策≫に唯一人協力して脱藩し京都に向かうが、藩の役人に捕縛されて、投獄される。その後、京都で高杉晋作、久坂玄瑞らの御楯組に血盟して、前イギリス公使館焼き討ちや下関での攘夷戦争に参画する。1863 年の七卿落ちには御用掛を務める。蛤御門の変では、藩主定広の軍で京都を目指していたが、敗戦と兄・入江九一の死（負傷自決）を知り引き返す。1866 年奇兵隊の挙兵に従い、四境戦争では、御楯組と共に奮戦し、幕府軍を打ち破り明治維新を迎える。維新後は藩政に参画、後に政府に出仕し、宮内太丞を拝命、外務大書記の時、岩倉使節団に加わり欧米視察する。

　山縣有朋と共に、廃藩置県は野村靖の提案が、採用されたものである。

帰国後、神奈川権令（1876－1878）、神奈川県令（1878－1881）、駅逓総監（1881）、逓信次官を歴任して、子爵（1887）、枢密院顧問官（1888）、駐仏公使（1891）を経て、第二次伊藤内閣の内務大臣（1894－1896）を務めるが、東京府を廃止して、東京 15 区を東京都に、その他の地域を多摩県とする「東京都制及び多摩県設立」法案を提出するが、帝国議会と市民の反対に遭い辞任する。その後、第二次松方内閣の逓信大臣（1896－1898）を歴任する。晩年は母や兄・入江九一についての「追懐録」を綴り,「留魂録」など松陰の書物を通じて、松陰思想の普及に努めた。現存の「留魂録」は、数奇な運命を経て、神奈川県令の時、野村の手に戻ってきたのである。松陰は伝馬町の牢獄で、刑死の前日に「留魂録」を書き上げ、一部は遺体引き取りに来た飯田正伯の手に渡り、高杉晋作や長州藩松陰門下生回し読まれ倒幕の火が点けられ奇兵隊の挙兵に繋がる。これは写本共々その後紛失してしまう。万が一を考えてもう一部が、牢名主・沼崎吉五郎に預けたのが現存の『留魂録』で、明治 9 年三宅島遠島の刑期を終えた沼崎から、神奈川県令だった野村の手に渡った。野村は明治天皇の娘、冨美宮・泰宮両親王の養育係を務め、鎌倉の御用邸で 66 歳にて没す。著書に『帝国地方自治行政説略』（明治 19 年）『国家論略・独逸帝国憲法要論・帝国憲法要論』（明治 20 年）『国家論略』（1889）などがある。「国のため倒れし人を惜しむにも思うは親の心なりけり」（明治 37 年）

最後まで松陰の命に従った弟子として、野村は妻と共に松陰神社に祀られている。

（２０１４・１１・２２　FC ブログ―奇才傾一世　野村靖、『留魂録』、ほか）

２１　内海忠勝（うつみ　ただかつ）1843‐1905　長州　２９歳　大使随行

七つの県知事を務めた地方行政のベテラン　会計検査院長　内務大臣

吉敷毛利の家臣・吉田治（次）助の四男に山口（吉敷）で生れる。旧山口藩士・内海良治（亀之進）の養子となる。通称：義助。豪助。精一。吉敷毛利藩校：憲章館に学ぶ。

文久３年、俗論派と対峙するため、吉敷毛利家家臣ら毛利登人、服部哲次郎（名和道一）、広沢真臣、桂小五郎らで創設の宣徳隊の結成に参加。元治元年、禁門の変（蛤御門）に参加するも、破れて長州に敗走する。その後、高杉晋作の呼びかけの奇兵隊に入る。慶応２年の第二次征長州戦争での四境戦争では，芸州口に戦う。幕府軍を敗走させる。同年、蘭学校に入学。

大政奉還後は、官軍に従軍して甲府で甲陽鎮撫隊により負傷させられる。

明治３年、大参事となり、明治４年、神奈川県大参事の肩書で岩倉使節団の大使随行となる。

明治６年に帰国後してからは、専ら地方行政官僚の道を歩む。

明治８年、兵庫県大参事（副知事格）の時、木戸が学校設立を目指す新島襄を紹介したが、内海は学校設立には賛成するが、キリスト教思想の学校には難色を示した。そのあと、新島は内国博覧会を見に行った京都で山本覚馬に会い開校を実現することになる。

長崎県令（1877‐1881）の明治１４年８月、胃病療養の為、兵庫の舞子浜で１０日間の海水浴請暇を太政大臣（三条実美）に求めた書状が残っている。

三重県令（1884－）、兵庫県知事（第九代、1885‐1889）、長野県知事（第二代、1889‐1891）、神奈川県知事（第三代、1891‐1893）《この時は、三多摩分離問題が起きて、分離賛成派に回る。この時から、神奈川県より東京都管轄に替わる。その理由が、幕末に甲陽鎮撫隊により負傷させられたことを挙げている。》

そのごも、大阪府知事（第八代、1895‐1897）、京都府知事（第八代、1897‐1900）と地方行政に一貫して携わっている。京都での明治 32 年、「角倉了以翁水利紀功碑」の銘文起草し、今も残っている。

明治３４年（1901）、同郷・吉敷出身の成瀬仁蔵（1858‐1919、キリスト教牧師）に協力を求められ、伊藤博文首相、山縣有朋など長州系の支援で日本女子大学の創設に貢献した。この発起人代表は西園寺公望である。

その後も、貴族院議員（1899‐1900 年）会計検査院長（1900‐1901）を歴任した。第一次桂太郎内閣では内務大臣（1901‐1903）まで昇進した。男爵。従二位勲一等大綬賞。（２０１５・８・２３、コトバンク、大隈文書―内海忠勝書簡、）

２２　久米邦武（くめ　くにたけ）1839‐1931　佐賀　３３歳　大使随行権少外史

特命全権大使　米欧回覧実記の編著作者　帝国大学教授

今、我々が岩倉使節団の研究ができるのも、久米の回覧実記なしには考えられない。

肥前佐賀城下八幡小路で佐賀藩士・久米邦郷の三男として生まれる。幼名：泰次郎。丈一郎。丈市。号：易堂。樸斎。七歳で藩校・蒙養舎で論語の素読。１０歳で儒者武富圯南の天燭社で典籍に親しむ。１４歳、元服。算術を学び始める。父に随き、長崎でロシア軍艦をみる。安政元年（1854）、藩校・弘道館の内生寮に入り、大隈重信、副島種臣を識る。儒書、史書、和漢世界地誌書に親しむ。２４歳、藩命で江戸に出て、昌平黌の書生寮で古賀謹堂に師事する。一年余で佐賀に戻り、弘道館の指南・藩主の近侍を務める。尊皇派結社の義祭同盟に加わる。フルベッキに会い、岩倉具視の子弟の九州遊学に協力。明治４年、鍋島直大と外遊計画に参画するが、前藩主鍋島閑叟が亡くなり中止閑叟の葬儀委員を務める。太政官発令で、権少外史に任ぜられ、最初は岩倉具視の私設秘書として、「大使附属枢密記録等取調」で岩倉使節団に随行し、米国からは帰国後の正式記録編纂を視野に「使節紀行編纂之儀専務ニ相心得、杉浦弘蔵ト申談、取調」として、米国から参加の杉浦弘蔵と共に、回覧中のすべてを記録することを命ぜられた。イギリス以降、回覧視察・見聞した詳細な記録を残すことになる。その内容は、政治、経済、産業、地理、歴史、人種、文化、学校、刑務所、病院、福祉施設、図書館、美術館、農業、鉱業、兵器産業、軍隊など森羅万象に及び、その博覧強記ぶりは驚異的であるが、その素地は、日本の産業近代化に先鞭をつけた佐賀藩主鍋島閑叟の侍従として、閑叟のあらゆる質問に調査・報告した経験や、父・邦郷が藩の重鎮として、藩主御側頭、山方（鉱山、石炭管理）、目安方（藩会計）、長崎聞役（大砲、軍艦購入、藩特産品輸出）、有田山代官（有田焼の生産販売管理）、大阪蔵屋敷詰（米の販売管理）、江戸、京都、大阪、堺、長崎、兵庫藩支所監督などのマルチ・ゼネラリスト的活躍の影響も無視し難い。

米欧回覧実記は明治１１年，全五冊・１００巻で博聞社から刊行された。その後は、太政官・修史館で重野安繹の下で編修に従事する。時に明治天皇の巡幸に供奉し巡回した。修史館廃止し、臨時修史局とない、それが帝国大学に移管されると、帝国大学教授に任じられる。然し、明治２５年に、「神道は祭天の古俗」（久米邦武筆禍事件）を契機に、大学を追われることになる。明治２８年、大隈重信の招聘で、東京専門学校（現早稲田大学）に奉じて、歴史学者として、日本古代史や古文書を、大正１１年まで講じた。昭和６年、９２歳の天寿を全うする。著書多数。『久米博士九十年回顧録』『久米邦武歴史著作集』（全五巻）『久米邦武文書』（全四冊）など。

（２０１５・８・２８　『久米邦武―史学の眼鏡で浮世の景を』（高田誠二）他）

２３　由利公正（ゆり　きみまさ）1829 - 1909　越前　４３歳　大使随行東京府知事

横井小楠の「王道政治」を実践した男　『五箇条の御誓文』起草

久かたのそらもひとつの波の上にすみこそわたれ有明の月

福井藩士・三岡義知（１００石）の長男として越前福井城下に生れる。旧姓三岡八郎（又は石五郎）字：義由。号：雲軒。明治から、三岡家の旧姓で、由利公正に改名。

嘉永６年（1853）２４歳で家督相続。この年、横井小楠が福井を訪れたのを機に、師事する。翌年、品川台場の警備に派遣され、黒船を目撃し、富国強兵に目覚める。安政２年（1855)、小楠を熊本に訪れる。安政５年、小楠が福井藩に招聘されると殖産興業や財政学を学ぶ。やがて、藩主：松平慶永（春嶽）の抜擢で、困窮していた藩財政の再建を命ぜられ、小楠の指導を受けながら、藩札を低利で生産者に融資し、特産の生糸を専売として、輸出の拠点を長崎、横浜に設ける一方、軍事面では越前海岸に洋式大砲を備え、鉄砲を量産した。文久２年（1862)、熊本に戻っていた小楠を江戸に連れ戻し、藩主・春嶽が幕府政事総裁職を命ぜられると、ブレーンの小楠と共に、春嶽の側用人となる。翌年、小楠の福井藩挙藩上洛計画で、藩論が割れて、その煽りを受けて、蟄居謹慎処分を受けて、大政奉還を迎える。その謹慎中に坂本龍馬の来訪を受けて交流しており、坂本龍馬は後藤象二郎宛の手紙に中で、「新政府の財政担当者は、三岡八郎」を推薦している。また、維新後、由利公正が起草した五箇条の御誓文の原文である『議事之体大意』と坂本龍馬の『新政府綱領八策』との思想的に類似性があるのは、この謹慎中の交流の証と言えよう。

明治維新後は、由利の『議事之体大意』をベースに土佐藩の福岡孝弟が加筆修正し、それに木戸孝充が再編集してなった『五箇条の御誓文』は、師・横井小楠と坂本龍馬の思想を継承するものでもあった。更に、龍馬の予言の通り、新政府の徴士・参与として金融財政政策担当の会計事務掛・御用金穀取締を拝命し、会計基立金募集や太政官札発行、商法司設置などの政策を推進したが、兌換性に難があり、太政官札が流通しなくなり、明治２年に辞職した。　明治４年、東京府初代知事に就任したが、その身分のままで、岩倉使節団随行のため、後発として参加する。回覧各国の自治・議会制度を調査視察した。帰国後は、明治６年の政変で下野した板垣退助、後藤新平、江藤新平、副島種臣らと一緒に、「民撰議院設立建白書」を提出する。土佐・肥前派に就いたのである。

明治８年、元老院議官に勅選され、明治２０年には子爵を綬爵。明治２３年貴族院議員、麝香間祇侯に任じられる。明治２７年、有隣生命保険会社の初代社長に就任した。（２０１５・８・２９　ブログ『黒船社中』(長谷川ヨシテル)、他）